

進化人類学分科会シンポジウム (S1)

「父系社会再考：ヒト亜科とクモザル亜科の比較研究」

オーガナイザー：古市 剛史

10月12日 (9:00~12:00) A会場

ヒトとの共通祖先であるアフリカ類人猿がいずれもヒトの狩猟採集民に多く見られる父系社会的傾向を示すことから、その進化についてさまざまな仮説が示されてきたが、未だ決定的な答えは得られていない。本シンポジウムでは、遺伝学、行動学の新しい研究も加え、また検討の対象をヒト亜科とクモザル亜科に広げることにより、父系社会の成立要因を再考する。

S1-1 アフリカ類人猿の地域個体群全体の中での血縁オスの分布

○石塚 真太郎¹

¹京都大学

S1-2 父系型社会におけるメス集団間移籍の至近的要因

○戸田 和弥¹

¹京都大学

S1-3 クモザル亜科における父系社会の多様性

○下岡 ゆき子¹

¹帝京科学大学

S1-4 ラミダスと、ヒトと類人猿の共通祖先像について改めて考えてみる

○諏訪 元¹

¹東京大学

S1-5 何がヒト亜科とクモザル亜科の父系社会を進化させたのか

○古市剛史¹

¹京都大学

S1 父系社会再考：ヒト亜科とクモザル亜科の比較研究

S1-1 アフリカ類人猿の地域個体群全体の中での血縁オスの分布

○石塚 真太郎¹

¹京都大学

アフリカ類人猿(*Gorilla*属、*Pan*属)は、ヒトに系統的に近縁な現生霊長類である。両属の社会構造に見られる主な違いの一つは、オスによる出自集団からの分散が*Gorilla*属でしか見られないことである。一方*Pan*属内では、ボノボでは異なる集団の個体間の交尾が頻繁に観察される一方で、チンパンジーではそのような交尾は稀であるといった種間の違いが見られている。このような属間、種間で見られる行動の違いは、地域個体群全体の中での血縁オスの分布に差を生み出している可能性がある。本発表では集団遺伝学的研究のレビューを通じ、アフリカ類人猿の地域個体群全体の中での血縁オスの分布の理解を目指す。それらを基に、人類の父系社会の成立基盤について議論したい。

S1-2 父系型社会におけるメス集団間移籍の至近的要因

○戸田 和弥¹

¹京都大学

オスが出自集団に留まり、メスが離れる「父系型社会」は、霊長類（ヒト科、クモザル亜科、コロブス属など）に、比較的多くみられる様式である。「どうしてメスが集団間を移籍するのだろうか？」本研究では、ヒトに近縁な「ボノボ」を対象に、コドモメスの社会行動と性ホルモンの加齢変化を調査し、移籍時期との潜在的な関連性を検証した。霊長類におけるメスの成熟過程と至近的メカニズムについて考える。

S1-3 クモザル亜科における父系社会の多様性

○下岡 ゆき子¹

¹帝京科学大学

クモザル亜科にはホエザル、ウーリーモンキー、クモザル、ムリキの4属が含まれる。ホエザルは母系と双系、その他3属は父系である。またホエザルとウーリーモンキーはまとまりの良い群れを作るのに対し、クモザルとムリキは離合集散する群れを作る。これら4属の社会に見られる特徴を比較し、進化方向について検討を行う。

S1 父系社会再考：ヒト亜科とクモザル亜科の比較研究

S1-4 ラミダスと、ヒトと類人猿の共通祖先像について改めて考えてみる

○諏訪 元¹

¹東京大学

「ラミダスと、ヒトと類人猿の共通祖先像について改めて考えてみる」2009年に、ラミダスに関して広範に発表して以来、人類とゴリラ、チンパンジー・ボノボとの共通祖先像について、可能な範囲で推察を試みてきた。しかし、その祖先像に適切な現生モデルがおよそないため、その実態を把握しきれず、また誤解をも生じてきた。一つの問題は、現存する類人猿の多様

性が限られていることにある。ここでは、クモザル亜科に目をむけながら、そうした背景と共通祖先像について復習しながら現状理解と問題点を若干なりとも整理してみたい。

S1-5 何がヒト亜科とクモザル亜科の父系社会を進化させたのか

○古市剛史¹

¹京都大学

霊長類にはオスが集団にとどまりメスが移籍する父系集団をつくる種が比較的多く見られる。コロブス類、ヒヒ類にも単発的な父系社会が見られるが、とくにヒト亜科を構成するチンパンジーとボノボはかなりはっきりとして父系社会をつくり、ゴリラの社会にも父系社会的要素が見られており、ヒトの社会との関連が注目されてきた。一方南米のクモザル亜科も、3種がいずれも父系集団をつくっている。ヒト亜科とクモザル亜科では体の大きさなども異なり、なぜこの2つの分類群に父系社会がまとまって現れるのかはこれまであまり検討されてこなかった。この問題の検討は、父系社会の進化の解明に新たな視点をもたらしてくれる可能性がある。